

二人の武蔵

五味康祐

第二卷



二人の武蔵

第二卷

五味康祐



新潮社

藏武の二人

第二卷

昭和三十三年六月二十一日 印刷
昭和三十三年六月二十五日 發行

定價貳百五十拾圓

地方
賣價 貳百六十拾圓

著 者 五 味 康 祐

發行者 東京都新宿區矢來町七十一
佐 藤 亮 一

印刷者 東京都千代田區神田神保町三ノ二三
塚 田 重

印刷所 塚田印刷株式會社

發行所 東京都新宿區矢來町七十一
株式會社 新潮社

電話東京三四局代表七一(九)
振替東京 八〇八番

製 本 神田 加藤製本所

第二卷
目次

月

光

七

燕かぎつ

子こ

花はな

四

一乘寺決闘

五七

誓

約

五七

修

行

三

對

決

一〇

吾亦紅

.....
一三五

奉納試合

.....
一六六

江戸へ

.....
一九六

雲雀

.....
三二七

ふたり旅

.....
三四八

挿 装
繪 幀

木
下
二
介

二人の武藏

第二卷

月 光

降りみ降らずみの日がつゞいて、やっと梅雨もあけようという五月二十八日、矢張り『虎が雨』が降った。

五月二十八日と云えば、一乗寺のいそが敷下りの決闘に一月半あまり前だ。

毎年この日は不思議と多く雨が降る。之を虎が雨という。むかし、大磯に虎女なる遊女があり、和歌を能くした。曾我の十郎祐成と深く愛しあっておった。十郎が仇を報じて死ぬに及んで、尼となり、彼の冥福を祈ったが、世人つたえて云う、この日の雨は虎女の涙が化して雨となったものであろうと。

千珠はそういういわれは知らない。うつろな眼で、もう半刻ちかくも岡本武藏たけざうの居なくなった離れ屋で、ぼんやりひさし庇をつたい落ちる雨を見上げている。その目から、時々大粒な涙がすーっと頬に流れる。

武藏は勘解由かげゆと云い争って、昨夜、千珠の頼むのを振り捨てて家を出て行った。所詮は、功名心に取りつかれた男だった。貧しい六兵衛にどんなに迷惑をかけ、傷をなおしたかを當の武藏は

いさゝかもかえりみようとしない。吉岡傳七郎に勝ったことで、一時に世間の注目をあびている——それだけでもう有頂天になっていた。そういう男の單純さは、千珠には併し左程苦にはならなかった。千珠が好きだったのも、武士には見られない、そんな武藏の天真らんまんところだったから。

たゞ、性質としては好もしくとも、それが武藝者にとっては、けっして褒めたものでないのを千珠は知っているから、出来るなら武藝を捨ててくれるようにと、これ迄にも幾度か掻き口説いてきたのである。武藏が承知するわけはなかったが、それなら、せめて今少し、常々の行動の上で、慎重な重みのある態度をとって下さらないかしらと、頼んだ。

「わしに、では生れ變れと云うのかい」

武藏は千珠のそんな願いを聞くたびに、一度は眞赤になって、怒る。

「わしは、生れついでに田舎者じゃ。いかにも禮儀を知らぬ。世渡りの作法を知らぬ。じゃが、武藝者は實力さえあれば立派に生きてゆける、とは知っておるぞ。わしは、ぶ、武藝さえ……」
あとは昂奮で言葉を詰らせて、たゞ、ギラギラ光る琥珀色の眼で千珠をにらむ。

そんなことが、幾度となく繰返されての、昨日であった。

勘解由とは凡そ氣性の正反對な武藏が、二三の言葉の遣り取りで、激怒して、この家を即刻立去ろうと云ったのも無理はない。

「千珠どの、六兵衛どの……いこうお世話をかけた。わしは、今、勘解由どのの申されたとおり、

なるほど厚かましい男じゃ。しかし、受けたお主たちの恩を、忘れるがような人非人ではないぞ。忘れるかい、誰が、お、お主たちを忘れるかい……」

云って、日の暮れきった夜道へぱっととび出して行った……。

大津の町から京へ出るには二通りの路がある。

逢坂山（おうさか）のすそを通って、日岡（ひのおか）、蹴上（げりあがり）を経て京都三條へ出る所謂（いわゆる）京津街道と、志賀峠（しやがとうげ）から山中越えに北白川へ出る道とだ。距離にすれば京津街道が近いが、時折、風流士は好んで山中越えをする。

虎が雨の蕭條（しょうじょう）と降る中を、その山中へ向って志賀峠を登ってゆくのは岡本たけぞうである。

一乗寺（いちじょう）藪下りへは北白川が近い。戦うなら地理に通曉しておかねばならない。當日が萬一、雨の場合を考えて、ふと武藏（たけざう）は京へ出るのにこの路をとることを思いついた。昨夜、三井寺下の木賃宿に夜を明かしたあと、道を北へ取った。

雨は霧のように降り、登り坂になるにつれて眼前の山容を雲がさえぎる。時として雲の上を歩いている感じになる。雨滴（うてぎ）が無数の霧となって、冷いやりと頬をなぞた。

岡本武藏は闘魂のかたまりのような今は状態だから、全身濡れねずみとなっても、寒さは感じない。例の着たきりすゞめが、

「わしが輕はずみな男か、千珠。お主はわしが乙に澄ますのをぞむのか。……見ておれい。このわしがどれほど強いか……」

うめくように獨り言を云っては、歩く。一步、一步、坂が急になると、はずみをつけるように、いよいよ何やらつづやく。

崇福寺址のあたりへ來た。

道の傍らに、古びた御堂があり、蔀が半ば開いて誰やら縁に休んでいる。

この雨の道を、わざわざ登る者が他にあるとは一寸、意外だったから、武藏はふと立停った。それからヒタヒタ雨道を踏んで近寄った。

相手は、茶筍髪の六十過ぎた老武士である。壯年の頃はさぞ頑健だったろうと思える體つきで、背をかぐめて、ぼんやり雨脚を見上げている。

「わしも休息致したいが」

聲をかけると、武藏が登って來るのには早くから氣づいている筈だが、別に振り向こうとせず、

「どうぞ」

と言った。武藏はまだ雨の中に突立って容易に隣りへ坐り得ない。

ようやく、相手は首をめぐらした。

「どう致されたな。濡れるは、よろしくないぞ。——坐りなされ」

「……」

「何じゃ、わしに見おぼえがおありか」

「お、お手前は……」

風が出て濡れた武藏の髪から雫が飛ぶ。

しばらく、猶も立ちつくして、

「わしは、この日までお手前がような人を見たことがない。お、おそろしいぞ。——姓名を明かして下され。わしは、播州の名もない兵法者で、岡本たけぞうと申します」

武藏がこれほど謙虚な態度をとったことはあるまい。

「まア坐ったら、どうじゃ。雨に濡れるが能ではあるまい」

岡本武藏（たけぞう）と聞いても、一向に興味のある表情をしないのは、京都吉岡傳七郎の死を知らぬ人に見える。

武藏はそれでも脱いだ笠（かさ）を手に、眉からしずくを落して立ちつゞけてから、

「では、坐らせて下されい」

ぺこんと頭をさげて、老武士の隣りに浅く腰かけた。

堂の庇（ひさし）が雨除けになる。全身濡れきっていることで、雨にうたれぬと却って或る寒さが襲う。

が、相手の身近かゆえ、手拭を出して肌を拭くこともならぬ。

「お主、兵法を勵んでおると？」

しばらくして老武士が尋ねた。

「誰に就いて修行したか、あて申そうかの」

「お、お分りになるのかい」

「お主の目の色、たゞの修行ではあるまい。さしずめ、……播州と申されたな？　ならば、――

十官かい」

「そうじゃ。お手前は、ござんじか？」

武藏は知己を得たように思うから、見る見る顔を輝かした。

老武士は咽喉をそらして庇の雨滴を仰ぎ見ている。

「のう、教えて下され、お手前は、どなたじゃ？」

「わしか。……伊藤景久と申すかの」

「や、や、や」

とび上らんばかり、武藏は雨の眞下へ出た。

「では、お手前が一刀齋どのかい。聞いたぞ、十、十官どの申されておった……日の本にわしが
劍を取って闘う相手はふたり、一は奥の山休賀、いま一人は伊藤一刀齋景久じゃとな」

「……」



「そうか。成程そうか。お手前なら、師が申されるも道理じゃ。うん。道理じゃ」

「何もそう力むには當るまい。は……ま、入られいと申すに。いゝ拵こしらえの差料がそれでは濡れよう」

しずくの落下を見上げつゞけていて、見るものは、ちゃんと見ている。

武藏はひとつ、大きな息をしてから、又並んで腰掛けた。

一刀齋と名乗った老武士が言った。

「お主、ぴちぴち致しておるな。羨うらやましい……若いうちは、そうなくては慍かなわぬことじゃ」

「は、はい」

「ハッハ……何もそうかしこまらずともよかろう。——どうじゃな、お主にあの、雨滴が斬れるかの」

「……」

「一度でない。底から落ちる迄に、お主なら何度斬れる?……」

一刀流の始祖伊藤一刀齋景久は、『本朝武藝小傳』に據れば近江國堅田かたたびの生れで、鐘捲かねまき自齋に従って中條流の刀槍術を修め、諸州を漫遊して天下一の刀術者となった。勝負を爲すこと三十三度也、遂に敗北を知らず、と云われ、「其の技術神の如く精妙、とても口訣こうけつの及ぶところに非ず」